

〈作 品〉

パウル・クレーの主題による作品Ⅱ

石 野 眞

Makoto ISHINO : A Work Based on Paul Klee's Theme II

クレー作品に内在する詩的で音楽的なテーマを考察するとともに、色と形の言葉による造形言語と造形思考による素晴らしいパウル・クレーの表現世界を私自身の表現に問いかけることは、生涯にわたる研究と制作の課題である。ここでは、日本基礎造形学会と倉敷市立美術館での作品発表について記す。

キーワード：パウル・クレー 中村二柄 日本美術教育学会 日本基礎造形学会 倉敷市立美術館

はじめに

「クレーはその美術上の手段においても、その造形内容においても、はるかに群をぬいて、われわれの世紀の最も独創力の豊かな画家です」—ゲオルク・シュミット

パウル・クレーの主題に基づく作品制作を続けている。この作品は日本基礎造形学会倉敷大会作品発表展のために制作したもので、倉敷市での「作品'06」として発表後、鳥取県展および島根県展デザイン部門招待作品、審査員作品として出品、展示された。

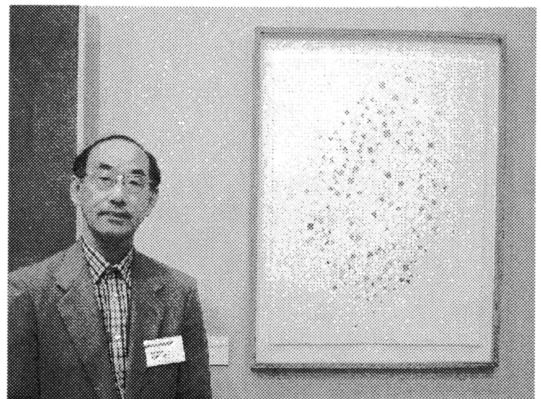
近代絵画の父と呼ばれるセザンヌは、厳しい観察と豊かな洞察力によって、「自然は球と円筒と円錐によって組み立てられている」と記し、自然を描くだけでなく、自然を組み立てている形の基本を構築するという新しい絵画表現を導いた。ここから近代の絵画は対象の描写から画家の表現に大きく委ねられるものとなった。

かたちの基本といもいえる小さな三角形と四角形という単純なかたちを水彩絵具により構成、表現し

てきた作品は、フランスのアルシュ水彩紙によるものである。絵の具は、画用紙によって発色が違い、私に取っては、この紙、アルシュ水彩紙は、とても良い表現効果をもたらしてくれている。

ここに、この作品とパウル・クレーの表現、そして日本基礎造形学会について記す。

日本基礎造形学会では、会員の作品展を学会期間中に同時に開催して来たが、昨年は宮城県美術館県民ギャラリーで作品発表を行い、本学の紀要54号に掲載した。



宮城県美術館県民ギャラリー

宮城県美術館では、西村勇晴学芸部長のご紹介で

パウル・クレーの館蔵秀作品を鑑賞する事が出来、うれしく感謝した次第である。

1 クレーの表現

クレーの主題について考察すると、バーゼル美術館長のゲオルク・シュミット博士は著書「近代絵画のみかた」において記す。

「クレーの出発点はもはや対象ではありません。彼の出発点は単純をきわめた幾何学的なフォルムそのものです。矩形、菱形、三角形、円、線などです。彼の出発点は一つの形式上のテーマで、幾何学的な基本形式のヴァリエーションの無限な可能性から自由に選ばれたものです。それは、ちょうど音楽家が、かれの素材である音の無限な可能性から、ある一定の、単純なテーマを決定するのと同じです。しかもこの瞬間からすでにクレーは、ちょうど音楽家と同じように、自分がそのテーマの法則に結びつけられているのを感じるのです」と。

ベルン美術館での先輩研究者、土肥美夫氏が、作品そのものの世界、つまりクレー自身の世界へ容易にとびこめなかった理由を「クレーの世界をクレー的あまりにもクレー的と感じたために思われる」と記して、容易にとびこめなかったクレーの表現世界そしてクレーの作品は、多くの人々をとらえるが、その思いを委ね、委ねられる事はきわめて稀である¹⁾。「クレーにおける詩的なもの」148-9頁、「ユリイカ」1972-6。

クレー研究において、多くの美術館とクレー展で、たくさんのクレー作品を見てきたように思う。スイスのベルンで1879年に生まれたクレーは、スイスでの学業を終えて、音楽と造形美術とのどちらを選ぶべきかを迷うが、ドイツのミュンヘンで美術を学び、生涯をともにする妻、ピアニスト、リリーと出会い、画家としての歩みを続ける。1920年にバウハウスの校長ワルター・グロピウスにより招聘され、翌21年にワイマールに転居、国立バウハウスの移転とともに Dessau に転居、市立バウハウスの再

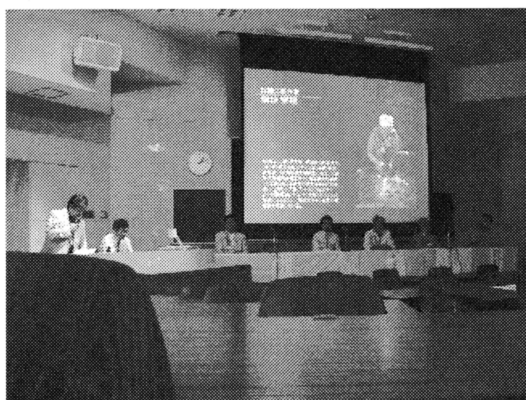
出発をともにする。

デュッセルドルフのアカデミーに招聘された後に故国、ベルンに転居。スイス国籍の復活を願いながらスイスのロカルノームラルトで逝去。葬儀は7月4日ベルンで行われた。

筆者はクレー研究の中で、世界の美術館を訪ね、また、日本での度々のクレー展に於いても、たくさんの作品を見てきた。これからの良き後日にクレーの足跡を辿ってみたいと思って止まない。

2 日本基礎造形学会

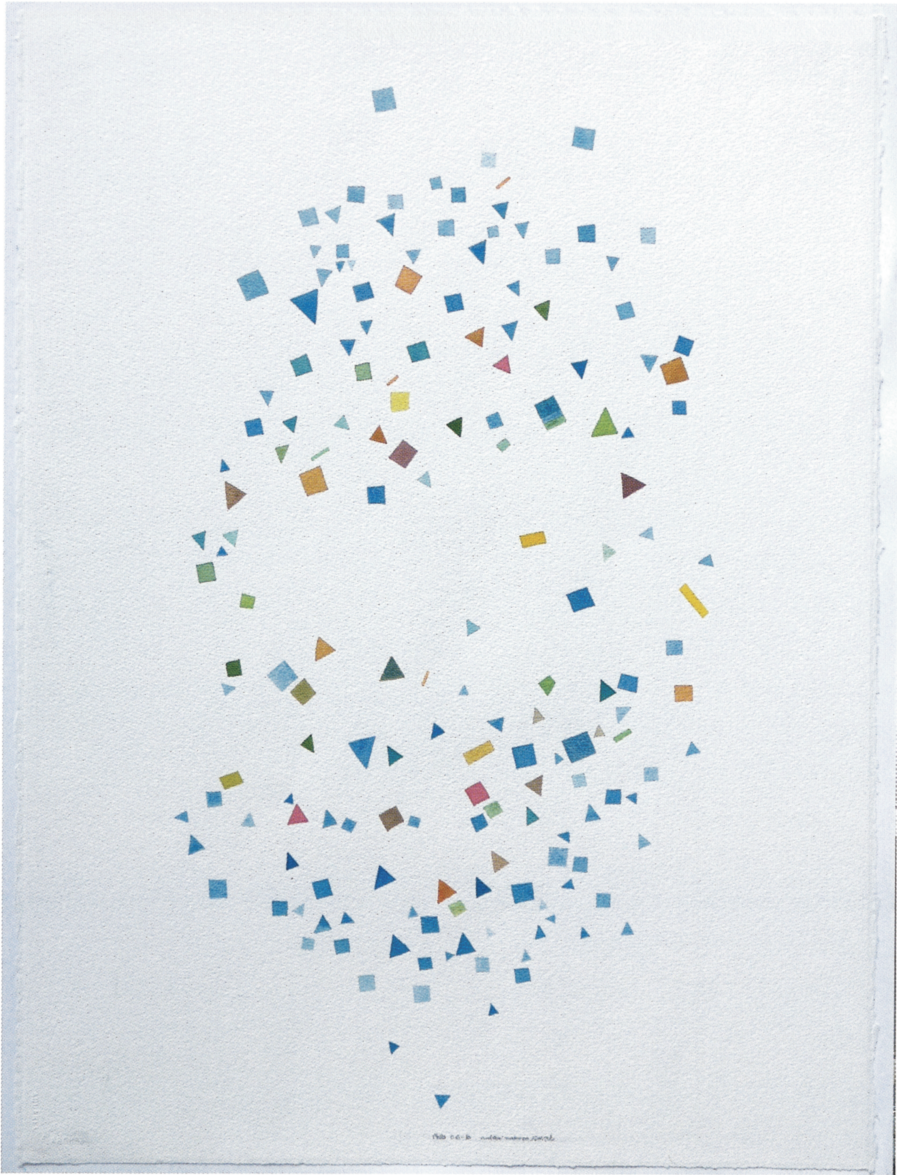
日本基礎造形学会では、会員の作品展を同時に開催して来たが、本年、2006年日本基礎造形学会第17回倉敷大会は、平成18年8月19日(土)～20日(日)川崎医療福祉大学で開催、日本基礎造形学会倉敷大会作品発表展は、学会に先立って、2006年8月15日(火)～20日(日)倉敷市立美術館第一展示室に展示され、ここでの会員によるギャラリートークは、19日(土)16:00～17:00に行われた。



学会シンポジウム—川崎医療福祉大学

学会会場では、第3回川崎医療福祉大学医療福祉デザイン学科実験展「人にやさしいでざいん」が併催された。

学会シンポジウムは、神戸大学教授でブライトン大学客員教授、中山修一氏の「モダニズム再考—シンプルなものとは本当にベストなのか」基調講演が



パウル・クレーの主題による作品 76cm×58cm
石野 眞

行われた。シンポジウムのテーマは「伝える・育てる」基礎造形／教育を考える一として、コーディネーターは、大手前短期大学教授で画家の高澤圭一氏。

パネリストは、日本的な自然観や世界観に根ざしながら地域交流をはかるランドアーティストの大久保英治氏。

千利休の茶室用火箸を作った技を蘇らせ妙なる音を響かせている伝統工芸作家、600年以上続く甲冑師の明珍宋理氏。

日本の近代・現代美術研究とともに美術館での企画展や教育普及事業に携わりながら館外企画等でもコーディネーターを務める大原美術館学芸課長の柳沢秀行氏により協議し討論した。

シンポジウム案内では、

今は、「何をどう伝え、どう育てる」を検証する時代が訪れている。明治以降、西洋の学問を伝える知識人の権威と教える側の優位性をもった教育方法の流れが、教える・学ぶの関係において、逆に「学ぶ」側の合意が必要となり、「教える」側はその恣意に従属せざるを得ない事実を問い始めている。教える側と学ぶ側の共通性の乏しい関係にどのような「共通性」の橋を架けるのか？情報化社会の進展に伴い、情報のデジタル化が知識・認識・記憶の希薄化を生み出しているのではないか。心に伝えることで共感や感動が生じるとすれば、学ぶ側に体験が必要であり、体験がなければ共感や感動は生じない等を記すなかで、貴重な提言や発表に恵まれ意義深い学会となった。

おわりに

本稿で引用した著書「近代絵画のみかた」について記す。著者は、バーゼル美術館館長のゲオルグ・

シュミット博士。記者の中村二柄先生は、1958年の春、ヴェルフリン研究が機縁となってヴェルフリンの高弟、パーゼル大学のガントナー教授の美術史研究室に留学された。その美術史研究室がバーゼル美術館の中にあり、ガントナー教授の講義や演習などもしばしば、館内に陳列されている原画の前で行われた。シュミット館長からこの著書を頂かれて帰国、翻訳出版された。私が手にしたのは、京都大学、楽友会館での日本美術教育学会学術研究大会で山崎博氏との共同研究発表に際して中村二柄先生から暖かく懇切な指導を賜ったときである。美術教育指導者に理論的な支柱をと説かれた井島勉会長を慕う研究者は美術教育の現場から大学の研究者まで多彩であった。毎年の秋に京都大学の楽友会館に集う研鑽と楽しみは、多くの美術教育の現場から大学での学術研究者を輩出した。私もその一人である。

現在は、若き日に井島研究室の助手を経て大阪大学名誉教授・立命館大学大学院教授の神林恒道会長のもとに、学会の本年は静岡文化芸術大学で大会が持たれ盛会であった。

学兄と学恩の師を偲びながら……擲筆。

参考文献

- ・「パウル・クレーの芸術—その画材と技法」西田秀穂著・東北大学出版会・200
- ・「ユリイカ」クレーにおける詩的なもの。148-9頁・1972-6。
- ・パウル・クレー「教育的スケッチブック」利光功訳・中央公論美術出版1991
- ・「パウル・クレー手稿・造形理論ノート」西田秀穂訳・美術公論社1988
- ・「近代絵画のみかた」150頁。バーゼル美術館長のゲオルグ・シュミット博士の著書。中村二柄訳・社会思想社1961